縁もない論調で、故齋藤緑雨氏や小川未明氏をお引合に出して、前者が『喰ふや喰はずで居ながら、文壇を罵倒したり』後者が『文壇の塵にまみれながら、清節を持してゐる』のが本當に偉いのだと云つてゐる。即ち、金があつて文壇を罵倒してはいけない、喰ふや喰はずで罵倒するのは偉いといふのだ。

更に同一論調で、『少し卑しくとも、汚くとも、親讓りの境遇や財産なんか當にしないで、自分の下らない創作によつてでも、妻子を養ひ、親兄弟の助にもなつて居る人間を、本質的に卑しいとは思はない。』と脱線した。いくら僻が強くても餘りに人を誣ふるものである。自分は、さういふ人を卑しいなどと云つた覺えは無い。そんな事をいふ本人の方が、内々卑しんでゐるのではないのか。『下らない創作』なんかする者は、その生活の貧富にかゝはらず、創作家としては偉くはないのだ。『作品は創作家に取つては、第一義的のものだ、根本的のものだ。』と說く菊池氏が、いかなれば作家批評家の價値を、金錢によつて計量するのか。現在の社會制度が惡いといふ問題を論じて居るのならそれでもいい。作品の價値の一切を金に結び付けかねない意氣込みには、閉口する外はない。此の論理の滅茶々々も僻根性も、すべてが金の問題だと肯定し、或は又、この僻根性の中にも『人間的な必然さや、弱さや、善良さ』を認めるといふのか。菊池氏からはいゝ收入でもあるらしく僻まれながら、實は安い月給と乏しい原稿料で暮してゐる自分の如きは、多大の原稿料で『妻子を育ててゐる』菊池氏の如き作家に對して、何と返事をしていいか迷はざるを得ない。しかし、今の世の中の制度に不備は認めながら、金持にも、親讓りの財産家にも、『人間的な必然さや、善良さ』を認める自分は、菊池氏の持つてゐるやうな僻根性を肯定する前に、一度は、それを憎み度い。

TOMODACHI といふ雑誌に出て居る三島章道氏の『日記より』といふ文章の中に、友達會の人達が芝居をしようとすると、貴族の出だといふ丈で、ひどく誤解され、脅迫された事實が書いてある。その脅迫狀の多くは『勞働者』といふ名のもとに書かれたものださうだ。『デモクラシイの盛んな今日、貴族が白粉を塗り狂言沙汰をするのは言語同斷だ。』と書いた新聞もあつたさうだ。かれこれ思ひ合せると、菊池氏の論調の如きも、今日の流行として通用するものかもしれない。『デモクラシイでやつてくれ。』と叫だ銀行の窓口の客も、『ブルヂョア氣分を漂はされては堪らない』と怒つた居酒屋の客も、菊池氏の如く、『誤つて文藝に志し』たら、同じやうな議論をする人になつたのであらう。多數者の力といふものを、暴論の裏に感じる時、自分の如き海鼠は、『默殺して下さい。』と歎願する外はない。

乍末斷つて置くが、菊池氏は『初夢』の末節で、自分の親友の二三は『撲殺の厄を免かれる事になつてゐる。』と書いて、××××××氏に對し八つ當をしてゐるが、それは同氏特有の僻目で、夢の中では自分の親友も、乍遺憾撲殺されたのである。『初夢』を讀んだ多くの人は、先刻御承知の事と思ふけれど、誤讀を宣傳されては堪らないから、爲念に斷つて置く。

『まだまだ云ひ度い事は澤山あるが、三百代言になりさうだから、止めて置かう。』（大正九年三月二十九日）

妾の子

毎朝學校へ通ふ時と、おひるから家へ歸る時と、町角の建具屋の店頭に立止つて、鉋の音を聽くのが好きだつた。すうすう――上から下に、向ふから手前に、柔かに撫でると、刃の間から薄い木の皮の波打つて湧いて來るのが堪らなく面白かつた。

『大人になつたら建具屋にならう。』

尋常科の生徒だつた自分は密にさう考へて、自由自在に鉋を使ひながら、小僧を叱りつけてゐる親方の身の上を羨んだ。

建具屋の隣は石屋で、この家は四十七士の一人堀部安兵衛の末孫だといふ事だつたが、暗い濕つぽい土間で、曲も無く金槌で石を削つてゐるのが――今になつ

て考へて見ると、藝術的でなかつたのだらう。子供の心をよろこばせなかつた。

日あたりのいゝ店頭に、いつぱいたまつた鉋屑の中に埋まつて、鉋を使ふ職人は、極めて樂しさうに見えた。額の汗を拭きながら、粉になつて飛ぶ石のかけらの埃を浴てゐるのよりも遙に明るい景色だつた。しかもその苦も無ささうに動く鉋の間から、めらめらと延びて、延びたと思ふと、くるくる卷いてしまふ鉋屑は、生きたもののやうに目についた。

日清戰爭の後だつたから、勿論軍人にもなり度かつた。軍艦の寫眞を澤山蓄めて、松島艦の艦長になる日の事も胸に描いた。福島中佐にもなり度かつた。郡司大尉にもなり度かつた。白神源次郎になつて、彈丸に胸を貫かれながら、尙且喇叭を吹きながら死んでも見たかつた。さうかと思ふと月岡芳年にもなり度かつた。買集めた繪艸紙を部屋中に並べて、やがては自分も『三十六怪選』を描かうと思つた。小波山人にもなり度かつた。『少年世界』で覺えた『貧乏ゑびすのへなちょこ野郎』などといふ言葉に節をつけてうたつた。けれども、けれども、自分は矢張建具屋の親方に一番なり度かつた。

『坊ちやん、何が面白いんだい。毎日々々見てるぢやないか。』

建具屋の若衆も顏馴染になつてしまつた。

『これやさしいの。』

やさしければ自分もやつて見度いと思つたのだ。

『こいつかい。やさしいとも。いいかい。かうやつてすうすうと引けばわけなしだ。』

氣の輕い男で、延した手を眞直に引いて見せてくれたが、長々とうねつた木の皮は、香をたてて湧いて來た。

「うまいなあ。」

自分は連の友達をかへりみて同意を求めた。

毎日々々、いくら見てゐてもあきなかつた。一番おしやべりで、自分達にからかつたり鼻うたをうたつたりしてゐるのが金ちやんで、顔半分に焼どのひつつりのあるむつつりしたのが糸さんで、鼻垂しの小僧が芳公だといふ事も覺えてしまつた。

芳ちやん夜中に嫁とつて……

などゝ一緒に學校へ通ふ町ッ子ははやした。

或日も學校の歸途に、五六人づれでその店頭に立止つて見てゐた。

「坊ちやん。坊ちやんとこはあすこの水上さんですか。」

金ちやんがきいたけれど、何時も戯談ばかり云ふ奴だから、何かしらからかはれるやうな氣がして默つてゐた。

「さうでせう。さうに違ひないや。」

「さうだよ。」

餘計な事を、連の乾物屋の子が受けて返事をした。

「それにしちやあ兄さんにちつとも似てないぢやないか。」

むつつりの糸公迄鮑の手を止めて、凄い顔を此方に向けた。

「そりやあお前、お妾の方のだからよ。」

仕事を休んで煙草をのんでゐた親方が、突然横からさばいてしまつた。自分は眞赤になつて目をそらした。胸が壓されるやうないやな氣持になつた。

「へええ、お妾があるかねえ。」

「なくつてよ。あれだけの屋敷だあな。」

誰が何を云つてるのだかわからなかつた。友達に顔を見られながら、涙の出て來るのを一生懸命堪へて、悄然として家に歸つた。

『自分はお妾の子なのかしら。』

俄に悲しい疑が惱ましく念頭に絡みついた。けれども、何處にもお妾らしいものはゐなかつた。うちには、父母の外に、お祖母さんが二人ゐた。父方のと、母方のとだ。兄がゐた。姉がゐた。妹がゐた。弟がゐた。親類の婆さんで、おちぶれて寄食人になつてゐるのもゐた。用人がゐた。車夫がゐた。女中が多勢ゐた。

しかしお妾はゐなかつた。

『嘘だ、嘘だ。お妾の子ぢやあない。』

と打消したが、打消し切れなかつた。いつもお祖母さん達が、兄と自分を比較していふ言葉迄、今更惡い意味に聞えて來た。

『兄さんとは違つて、此の子はまるで熊見たやうだ。』

さうだ、矢張り自分は兄とは似てゐない筈なのだ。みんなでかくして居たつて知つてるぞ。だから自分ばかり叱るんだ。と思つた。一番いたづらで亂暴だつたから叱られたのだけれど、その時はさうは思へなかつた。父の顔も、母の顔も就中兄の存在が忌々しかつた。

夕方一人で窓に倚つて、星の輝く空を見ながら、いつ迄も、いつ迄も涙ぐんで居た。

それつきり、建具屋の仕事場には興味がなくなつて、建具屋の親方になる位なら、足利尊氏の方がましだと思つた。

當分の間、自分は妾腹の子なのかしらと疑ふ心持は、折に觸れて出て來た。若しさうとすれば、お妾は死んでしまつたのかもしれないと思つた。しかし何時迄

たつても、お妾の居た形跡もないので、長い間には自然と忘れてしまつた。

やがて數年後の事である。忘れもしない暑中休暇になつて、明日から鎌倉へ行かうといふ日の事だつた。床屋に行つて、頭の上に鳴る鋏の音を聞いてゐる耳元に臭い息を吹かけながら、

『鎌倉の別荘には、ふだんお妾がゐるんですか。』

と若い者がひそめいて訊いた。自分は吃驚して立上らうとした程だつた。

『ううん。番人がゐる丈だよ。』

それつきり不嬉嫌に口をつぐんでしまつたが、腹が立つよりもなさけない氣持になつた。矢張り何處かにお妾はかくしてあるのかしらと疑ひ出した。恰もその頃は、中學で落第ばかりして居たので、叱られる事が多く、うちにもゐたたまれなくなりかけて居た心持が、一層邪推を深くしたが、結局之も疑に過なかつた。

『馬鹿な心配をしたものだなあ。』

後々思ひ出してをかしくなる事だつた。

父は身を守る事の極めて謹嚴な人だつた。政治家も、實業家も、軍人も成金も、いづれも妾を蓄へ、機會さへあればあらゆる階級の女性――素人でも、玄人でも――を犯さうとする物騒な世の中には、堅苦しがられる程だつた。或時、脅喝專門の雜誌が、父に惡癖があつて、家に雇ふ女に對して面白くない事があると書立てた時、果してそれがほんとだつたら數萬金を出さうと云ふ物好きさへ現はれたが、誰一人此の賭の相手方に廻る者がなかつた。自分はその時、曾て妾の子ではないかと疑つた自分の邪推深い心を耻ぢた。

更に又幾年か後の事である。或酒席で、座にゐた藝者が、人々が呼ぶ自分の名前をきいて、しきりにじろじろ顔を見てゐたが、

『失禮ですが貴方は水上さんの弟さんでゐらつしやるんで　か。』

と訊いた。話をしてみると、兄の顔馴染だつた。

『ちよいとふうちやん、こちらね、あちらの弟さんでゐらつしやるんだとさ。』

その藝者は、少し離れて座つてゐる朋輩を呼かけて面白さうに云つた。

『へえ、こちらが。』

呼かけられた頓狂な顔付のは、お銚子を手に持つたまま立上つて、裾を引擦つてやつて來た。

『どうしたつてんでせう。お兄さんはあんなにおきれいなのに、貴方はこんなにお汚ない……』

少し酔拂つたのは、つくづく見入つて嘆息するやうにつぶやいた。

『そりやあ似てない筈さ。僕は妾の子なんだもの。』

自分は事もなく受けて一緒になつて笑つた。（大正九年四月二十四日）

貝殼追放　終

大正九年九月廿日印刷
大正九年九月卅日發行

貝殼追放
定價貳圓八拾錢

著者　水上瀧太郎　東京市芝區三田一丁目十三番地
發行者　本多貞一　東京市麹町區有樂町二丁目一番地
印刷者　吉原良三　東京市麹町區有樂町二丁目一番地
印刷所　報文社印刷所

國文堂出版部

發行所　國文堂書店
東京市芝區三田一丁目十三番地
振替口座東京四六九四九番

水上瀧太郎著作目錄

處女作（處女作。ものゝ哀れ。ぼたん。うすこほり。嵐。いたづら。）

その春の頃（その春の頃。途すがら。沈丁花。）

心づくし（噂。賢さん。友だち。世の中。心づくし。評議員會。良緣）

海上日記（海上日記。船中。同窓。楡の樹蔭。）

旅情（汽車の旅。大都の一隅。ベルファストの一日。新嘉坡の一夜。霧の都。）

大空の下（倶樂部。火事。大空の下。先生。）

亞米利加記念帖（紐育リヴアプウル。落葉の頃。秋。祭の日。伊太利の女優。ロバアトソンの一世一代。フアンニィの處女作。久しぶりで芝居を見る記。無名會の「夜の潮」）

貝殼追放（新聞記者を憎むの記。八千代集を讀む。愚者の鼻息。「その春の頃」の序。購書美談。向不見の强味。先生の忠告。「末枯」の作者。兵隊ごつこ。女人崇拝。永井荷風先生の印象。文明一週年の辭を讀みて。幻の繪馬の作者。泉鏡花先生と里見弴さん。初夢。此の頃の事。妾の子

日曜（日曜。次の日曜。友情。）

544
96

終